

## 出エジプト記7章－8章19節 「十の災いの始まり」

### 1A 主の命令 1－7

### 2A 神の力の現れ 8－13

### 3A エジプトの神々への裁き 7:14－8:19

#### 1B 生命の源ナイル 14－25

#### 2B 豊かさの現れ、蛙 1－15

#### 3B 地の塵からのブヨ 16－19

## 本文

出エジプト記7章を開いてください。私たちは前回、モーセとアロンがファラオにところに行っても、全く言うことを聞かれなかったばかりか、イスラエル人を逆に、ますます酷使したところを読みました。モーセも、自分はもう口下手でファラオのところに行きなさいと言っても、聞いてもらえませんか訴えたところで終わりました。そして、7章以降の主の言葉から、大きな転換が起こります。モーセとアロンは、ようやく自分たちが、他のことは思い煩わないで主の命じられたことだけを行っていくことに専念することを決心できたからです。主が行われようとしていることに、私たちが合わせること、心を一つにするところに、神の偉大な力が現れることを、一昨日の礼拝における「からし種のほどの信仰」のところでも学びました。そして続けて、エジプトという土壌が私たちの住むこの世というものを、如実に表しています。

### 1A 主の命令 1－7

1【主】はモーセに言われた。「見よ、わたしはあなたをファラオにとって神とする。あなたの兄アロンがあなたの預言者となる。

これは、ファラオに対してモーセの言っていることを代弁する者としてアロンを立てるということをお話しておられます。主がモーセを召された時に、モーセが口下手だということを訴えた時に、アロンが代わりに話す約束されていました。モーセが語り、それをアロンがファラオの前で話します。したがって、ファラオにとってはモーセが神のような存在であり、アロンがその言葉を取り次ぐ預言者のようである、ということです。

この図式は、多神教を信じるファラオには分かり易かったことでしょう。私たちが読んでいる出エジプト記は、日本の人たちも顔が青ざめるほどの多神教国家です。全てのものが神々として拝まれ、実にファラオ自身が太陽神アメンから生まれた子であり、ホルスという天空の神であるとされてきました。そのために、彼は政治を行うだけでなく、宗教儀式にも深く関わり、彼自身も神としてあがめられる存在となっていました。そのため、モーセとファラオとの対峙は、エジプトの神々と、イスラエルの神との対決のような図式に、エジプトの人たちにとっては見えたことでしょう。

2 あなたはわたしの命じることを、ことごとく告げなければならない。あなたの兄アロンはファラオに、イスラエルの子らをその地から去らせるようにと告げなければならない。

主の命じられることをことごとく告げる、ということ。これが彼らの唯一の責任でした。主のしもべになりなさい、ということです。これまで、モーセはファラオが言うことを聞かない、民が言うことを聞いてくれないと嘆いていました。けれども主は、モーセが何を言ったか、彼らがどんな反応を示すか、ということは関係なく、ただ、わたしがこれこれのことをすると言われるのみです。主がすべてを行われるのです、大事なのは彼らが、そして私たちが主の言われることを行っていくことです。

3 わたしはファラオの心を頑なにし、わたしのしるしと不思議をエジプトの地で数多く行う。4 しかし、ファラオはあなたがたの言うことを聞き入れない。そこで、わたしはエジプトに手を下し、大いなるさばきによって、わたしの軍団、わたしの民イスラエルの子らをエジプトの地から導き出す。

ここには、三つの神の働きが書かれています。一つは、「ファラオの心を頑なにし」というところですが。この前、お話ししましたように、これはパロが心を広げたいと思っているのに神が、彼の自由意志を曲げてまで頑なにしているということではない、ということです。むしろその反対で 4 節にあるように、ファラオが全く彼らの言うことを聞き入れないのですが、その頑なさも神の主権の中に入っているということです。パウロはローマ 9 章において、ユダヤ人の全てが福音を信じないで、むしろ頑なにしているということが、神の主権の中で起こっていると論じていて、そこにパロの心を頑なにされたことが書かれています。私たちは、とかく二元論で善悪を判断します。悪いことが起こると、神はそのことに対して無力であるか、あるいは力を持っていたら、悪い意図を持っているのか？と感じてしまいます。そのため、悪いことについてはそこから神を頭の中で追い出してしまいがちです。けれども、すべてのことは神から始まり、神によってなり、神に至ります。人の頑なさも、悪魔の仕業も神はすべてご自分の主権の中に置いておられます。

そして次に、主は御力を示されます。「わたしのしるしと不思議をエジプトの地で数多く行う」と言われます。私たちが忘れがちなのは、福音というのは、四つの法則にあるような言葉が並んでいるものではなく、信じる者に働く、救いをもたらす神の力だということです。力が、人々に及んで、そこにある暗闇の力を打ち砕かれるということが、本質的に起こっていることです。いろいろな理由や分析を私たちはすることができるかもしれませんが、御霊と力の現れが神の働きの中心です。そして三つ目に、神は真実な方だということです。「わたしの民イスラエルの子らをエジプトの地から導き出す」と言われます。これは、アブラハムの時から主が約束されていたことで、四百年という月日が経った今も、それを忘れることなく必ず実行してくださるということです。

ところで、「わたしの軍団、わたしの民」とあることは興味深いです。主は、奴隷の集団を、エジプトのパロに対して軍団のような存在にしてくださいということです。事実、エジプトの軍隊をエジプトを出て行ったイスラエルの宿営にファラオは送り出します。そこで紅海の水によって主は彼らに戦

われます。イスラエルが、後に荒野において軍務につくことのできる者たちの人口調査をさせて、事実、武装する者たちを神はお造りになられました。たとえそうでなくとも、神ご自身が戦ってくださる軍団なのだということです。新約聖書において、教会を戦い、奮闘する存在として描かれています。

5 わたしが手をエジプトの上に伸ばし、イスラエルの子らを彼らのただ中から導き出すとき、エジプトは、わたしが【主】であることを知る。」

主は、このしるしや不思議を通して、ご自身が主であることをエジプトに知らしめます。エジプト人が主なる神を知るためです。主がご自分で伝道を行われている、と言ったらよいでしょうか。エジプトの神々や、頼りにしているものに災いを下すことによって、これらは無力であるということをお示しになります。12章12節で主が言われていますが、これからの災いは、神々に対するものです。

6 そこでモーセとアロンはそのように行った。【主】が彼らに命じられたとおりに行った。7 彼らがファラオに語ったとき、モーセは八十歳、アロンは八十三歳であった。

ここに大きな分岐点があります。8節以降の話で、モーセとアロンは、「主の命じられたとおりに行った」という文章を読みますが、それ以外に、彼らが行ったことはないのです。主が命じられ、彼らが行い、そして主が不思議としるしを行われます。主が命じられていることには、主が責任を取ってくださいます。結果に対して私たちが責任を持つ必要はありません。

そして、先のイスラエルを軍団として導き出すことに対して、それにあまりにもふさわしくない高齢の二人が選ばれています。一人が80歳、もう一人が83歳です。ここにも、神が人の限界とは関係なく、いや、むしろ限界を通して神は働いてくださいます。ちなみにモーセの生涯は、象徴的です。寿命は120歳でした。40歳までエジプト、80歳まで羊飼ひ、そして120歳まで荒野に居ました。四十が三つです。四十とは試練や裁きを象徴していますが、モーセの生涯で神の正しい裁きがこの世界に示されました。

## **2A 神の力の現れ 8-13**

8 また【主】はモーセとアロンに言われた。9 「ファラオがあなたがたに『おまえたちの不思議を行え』と言ったら、あなたはアロンに『その杖を取って、ファラオの前に投げよ』と言え。それは蛇になる。」

ここでは、ファラオがモーセに対して挑戦することを、主が前もって伝えているところです。あなたが言っている神を見せてみなさい、という意味で、不思議を行えと言っています。そこで、モーセにかつて主が示してくださったように、杖を蛇になることを約束されています。当時、ファラオには、魔術が極めて重要な位置を占めていました。魔術をする者たちがいて、自分の政策を決めたりする

ので、切っても切り離せないようなものでありました。ファラオに分かる形で、神が語っていることを主は示されます。

10 モーセとアロンはファラオのところに行き、【主】が命じられたとおりに行った。アロンは自分の杖をファラオとその家臣たちの前に投げた。すると、それは蛇になった。11 そこで、ファラオも知恵のある者と呪術者を呼び寄せた。これらエジプトの呪法師たちもまた、彼らの秘術を使って同じことをした。

事実、このような秘術を行う者たちには、超自然的なことが起こります。世界を見回しても、そしてここ日本においても、まやかしもかなり多いですが、本当に超自然的なことを起こす者たちがいます。初めのしるし二つ、ナイル川を血に変えることと、蛙を出すことは、彼らも行いました。これはもちろん、主のなされていることではなく、魔術の世界ですから悪の力からやってきています。そして、主がファラオにご自分の力を示そうとしているのに、それを妨げようとします。まさに霊の戦いです。パウロは、教会でそのような働きを妨げる者たちが現れることを警告し、この二人の魔術師の名を挙げています。「たぶらかしている者たちは、ヤンネとヤンブレがモーセに逆らったように、真理に逆らっており、知性の腐った、信仰の失格者です。(2テモテ 3:8)」

12 彼らがそれぞれ自分の杖を投げると、それは蛇になった。しかし、アロンの杖は彼らの杖を呑み込んだ。13 それでもファラオの心は頑なになり、彼らの言うことを聞き入れなかった。【主】が言われたとおりであった。

主が、そのような反対の中でもご自分の力のほうが偉大であることを示されています。なんと、相手の杖の蛇を、アロンの杖のほうが飲み込んでしまいました。神の力は、このようにこの世にいる者よりも強いのです。しかし、ファラオは心を頑なにしています。ここに、世における人々の高ぶりが見えます。それは、「あなたはイエス・キリストだというけれども、私にはきちんと、これこれがあるからね。」と、他に頼り頼むことができるものがあり、それも福音で語られているのと似たようなことをやるから、大丈夫だ、足りていると断るのです。

そして、「【主】が言われたとおりであった。」とあります。心を頑なにすることは、とても残念なことですが、それは厳粛な現実であり、主が前もって語られていることです。終わりの日に関して、困難になるということにも、人々の罪が絡んできます。それらは悲しいこと、残念なことですが、しかし主がそうなる前もって語ってくださっていることであります。

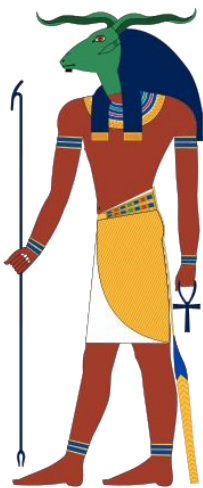
### **3A エジプトの神々への裁き 7:14-8:19**

#### **1B 生命の源ナイル 14-25**

14 【主】はモーセに言われた。「ファラオの心は硬く、民を去らせることを拒んでいる。

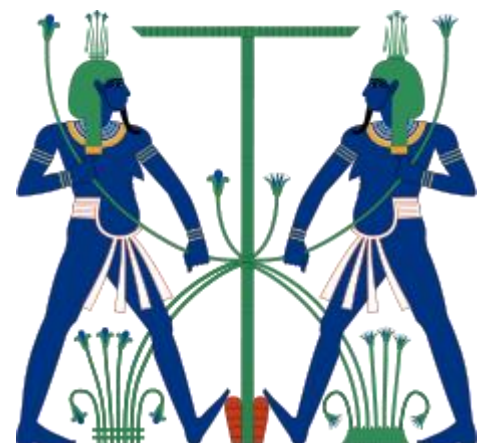
14 節から、主は十の災いをエジプトに下します。最後の災いの直前に守られる、過越の祭りは、神がイスラエルに永遠に守り行なえと言われたことであり、今でもユダヤ人が守っていますが、そこに十の災いを示す儀式があります。それを子供たちと一緒に、一つ一つを覚えます。そして、キリスト者はその過越の食事の場面で、教会に対する命令である聖餐が行われます。イエス様の流される血と、裂かれる肉を覚えるのですが、それでこれら十の災いはとても重要です。

最後の災いによって、ファラオがイスラエルを無理やり追い出すのですが、その前の九つの災いには、周期があります。三つの周期があります。第一から第三の災い、第四から第六の災い、第七から第九の災いです。それらの災いを受けてもファラオが拒むので、その勢いはもっと酷くなっていきます。なぜ、三つの周期だと言えるかといいますと、ファラオが朝に、ナイル川の岸辺に出てくるのです。それが第一の災い、第四の災い、第七の災いの始まりにあります。そしてそれぞれの周期で最後の災いは、警告なしに行います。同じような流れを見ます。



15 あなたは朝、ファラオのところへ行け。見よ、彼は水辺に出て来る。あなたはナイル川の岸に立って、彼を迎えよ。そして、蛇に変わったその杖を手に取り、  
16 彼に言え。『ヘブル人の神、【主】が私をあなたに遣わして言われました。わたしの民を去らせ、彼らが荒野でわたしに仕えるようにせよ、と。しかし、ご覧ください。あなたは今までお聞きになりませんでした。17 【主】はこう言われます。あなたは、次のことによって、わたしが【主】であることを知る、と。ご覧ください。私は手に持っている杖でナイル川の水を打ちます。すると、水は血に変わり、  
18 ナイル川の魚は死に、ナイル川は臭くなります。それで、エジプト人はナイル川の水を飲むのに耐えられなくなります。』

ファラオが水辺のところに出て来るのは、一種の宗教儀式です。ナイル川を拝んでいると言ったらいいでしょうか。「我々は、このようなナイル川があるのだ」という誇りに対して、神は激しく打たれます。ナイル川はエジプトの生命と言って過言ではありません。古代エジプト文明はナイル文明と言っても過言ではありません。エジプトは半砂漠気候の地域です。ナイル川周辺から少し離れると、そこは砂漠です。ナイル川は、その農業に大きな貢献をしています。その洪水による川の氾濫によって周囲の地域に肥沃な土が敷かれます。人々はそれでナイル川をほめたたえ、事実、ナイルを賛美する歌も見つかっています。そしてナイル川によって暦を作り、彼らの生活はナイルを中心に回っていたのです。そしてもちろん、漁業も盛んでした。また運輸業も、舟によって物を運んでいたのが大事でした。そして、ナイル自体もいろいろな神々となっています。クニムという、羊の頭をした神はナイルの氾濫を司る神でありました。ハピという神は、まさにナイル川そのものの化身です。したがってナイルを打つことは、この誇りを打ち砕くことに他なりません。





ナイル川が血になるというのは、これはナイル川というものにある生命が断たれることを象徴しています。実際に血になったのか？ということについて議論がありますが、それは実際かもしれないし、血のように見えるのかもしれませんが。けれども、それはあまり大事ではなく、人々の命の拠り所が取られる、生き物も命を取られる、そして潤いを与えるナイルが臭みを出すという、命の根本を揺るがされます。

19 【主】はモーセに言われた。「アロンに言え、『あなたの杖を取り、手をエジプトの水の上、その川、水路、池、すべての貯水池の上に伸ばしなさい。そうすれば、それらは血となり、エジプト全土で木の器や石の器にも血があるようになる。』」20 モーセとアロンは【主】が命じられたとおりに行った。モーセはファラオとその家臣たちの目の前で杖を上げ、ナイル川の水を打った。すると、ナイル川の水はすべて血に変わった。

ファラオやその家臣たちは、この杖が蛇になったのを見たにも関わらず拒んだのですから、主は同じ杖を持ち上げさせ、そしてこれらの災いを下されます。これで明らかに、自分たちが主に聞かない頑なさが災いしていることを示しています。災いが徹底していることは、ナイル川のみならず、川からくみ上げた水についても、血に変わるようにされています。

21 ナイル川の魚は死に、ナイル川は臭くなり、エジプト人はナイル川の水を飲めなくなった。エジプト全土にわたって血があった。22 しかし、エジプトの呪法師たちも彼らの秘術を使って同じことをした。それで、ファラオの心は頑なになり、彼らの言うことを聞き入れなかった。【主】が言われたとおりであった。23 ファラオは身を翻して自分の家に入り、このことにも心を向けなかった。

自分の呪法師たちが、同じ秘術をしたので、これだけの被害が出ているのに聞き入れませんでした。そして自分の家に戻っていきと言っています。そこで主は、そのファラオの家にも影響の及ぶ災いを次に行われます。

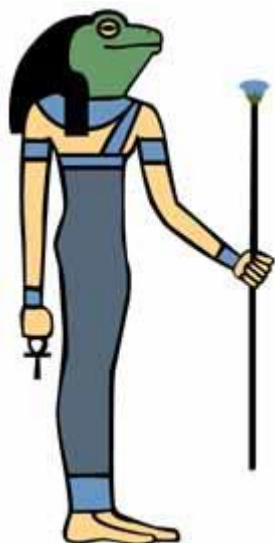
24 全エジプトは飲み水を求めて、ナイル川の周辺を掘った。ナイル川の水が飲めなかったからである。25 【主】がナイル川を打たれてから七日が満ちた。

七という数字は神の数字ですが、エジプトの民は飲む水がなくて困っていることを通して、ナイルというものに対する信頼が変わったのではないかと思います。自分たちがあまりにも当たり前に行っていた神が、当たり前ではなかったということを知る機会にあずかれたのです。イスラエルの神を知る機会にあずかれました。

## 2B 豊かさの現れ、蛙 1-15

1 【主】はモーセに言われた。「ファラオのもとに行って言え。【主】はこう言われる。『わたしの民を去らせ、彼らがわたしに仕えるようにせよ。2 もしあなたが去らせることを拒むなら、見よ、わたし

はあなたの全領土を蛙によって打つ。



©2001 NEFERCHICHL.COM

ナイル川を打たれてから、しばらく経った後でしょう。血が元通りの水になり、ナイル川にも生命が戻ってきました。蛙ですが、エジプトでは蛙がナイル川の豊かさの象徴となっていました。とてつもない数の蛙が棲息しており、そこにある豊かさから、神としてあがめられていました。ヘケトという女神です。蛙の頭を持っています。そして、蛙の形が胎児にも似ているので、多産の神でもありました。蛙によって打つと主は言われますが、蛙を殺すことではありません、その反対です。

3 ナイル川には蛙が群がり、這い上がって来て、あなたの家に、寝室に入って、寝台に上り、またあなたの家臣の家に、あなたの民の中に、さらに、あなたのかまど、こね鉢に入り込む。4 こうして蛙が、あなたと、あなたの民とすべての家臣の上に這い上がる。』

蛙が、家の中にも入るほど、大量発生します。良いもの、豊かさを与えるものも、もしそれがありすぎると呪いになります。民数記で、肉がほしいと言って、食べきれないほど与えられて、その後、死んでしまったという裁きがありましたね？それと似ています。そして寝室に、寝台に上がってきます。寝るという行為が非常に不快なものとなります。次に、食べるという行為にも大きな問題が起こります。料理を作るかまどやこね鉢にも入り込みます。ナイル川については、民がどんなに苦しんでも構わないと冷淡になれたことでしょう、しかし、今は違います。主は敢えて、パロの家と家臣の家でそのようになると警告されたのです。

5 【主】はモーセに言われた。「アロンに言え。『杖を持って、あなたの手を川の上、水路の上、池の上に伸ばせ。そして蛙をエジプトの地に這い上がらせよ』と。」6 アロンが手をエジプトの水の上に伸ばすと、蛙が這い上がって、エジプトの地をおおった。

ナイル川は、春から夏にかけて洪水が起こり、氾濫します。そして秋になって、水位が下がり、そのためにあちこちに、ため池のようにして水が残ります。そこにも蛙が棲息しています。その蛙にも杖を向けて、水路や池の上にも伸ばしています。

7 呪法師たちも彼らの秘術を使って、同じように行った。彼らは蛙をエジプトの地の上に這い上がらせた。8 ファラオはモーセとアロンを呼び寄せて言った。「私と私の民のところから蛙を除くように、【主】に祈れ。そうすれば、私はこの民を去らせる。【主】にいけにえを献げるがよい。」

とても面白いことが起こっています。呪法師も同じように蛙を這い上がらせることはできましたが、彼は呪法師らに蛙を取り除くことを願いに行くのではなく、モーセとアロンにお願いしにきました。

彼は心の奥底で分かっていたのです。自分の呪法師ではなく、モーセとアロンの所に行ったのです。パロにとって、エジプトの神々は自分の誇りでありこそすれ、救いではなかったのです。私たちの神は、自分を誇らせるための対象ではなく、救いの対象ですね。

9 モーセはファラオに言った。「蛙があなたとあなたの家から断たれ、ナイル川だけに残るようにするため、私が、あなたと、あなたの家臣と民のために祈るので、いつがよいかを指示してください。」10 ファラオが「明日」と言ったので、モーセは言った。「あなたのことばどおりになりますように。それは、あなたが、私たちの神、【主】のような方はほかにいないことを知るためです。11 蛙は、あなたと、あなたの家、家臣、民から離れて、ナイル川だけに残るでしょう。」

モーセは、ファラオに敗れて、いつ祈ればよいか尋ねています。このことによって、ファラオ自身がイスラエルの神に関わざるを得ないようにさせています。主は、ご自分の救いを行われる時に、人々に関わらざるを得ないようなところに、導いて行かれます。そしてモーセは、しっかりと釘を刺しました。これが、ただ今の不快を取り除くためではなく、主のような方は他にいないことを知るためです、と言っています。多くの人が便益は求めても、神を求めません。

12 こうしてモーセとアロンはファラオのもとから出て行った。モーセは、自分がファラオに約束した蛙のことで【主】に叫んだ。13 【主】がモーセのことばどおりにされたので、蛙は家と庭と畑から死に絶えた。

モーセは、平然とファラオの前にいましたが、帰ったら、自分の言ったことを、信仰によって宣言したのですが、本当に起こらなかつたら大変なことになります。必死に祈っています！これも、面白いです。ペテロが、神殿税を徴収しに来た人に対して「納めます」と言ってしまうから、イエス様のところに助けを求めにいったのと似ていますね。

14 人々はそれらを山のように積み上げたので、地は悪臭で満ちた。15 ところが、ファラオは一息つけると思うと、心を硬くし、彼らの言うことを聞き入れなかった。【主】が言われたとおりであった。

「喉元過ぎれば熱さを忘れる」という言葉がありますね。ファラオは、まさにそれです。熱い時に、「主に祈ってくれ。いけにえを捧げてもよい」と言ったのですが、それが過ぎたので心を硬くしました。けれども大事なのは、「【主】が言われたとおりであった。」という言葉です。この罪の現実を、主は前もって知っておられます。

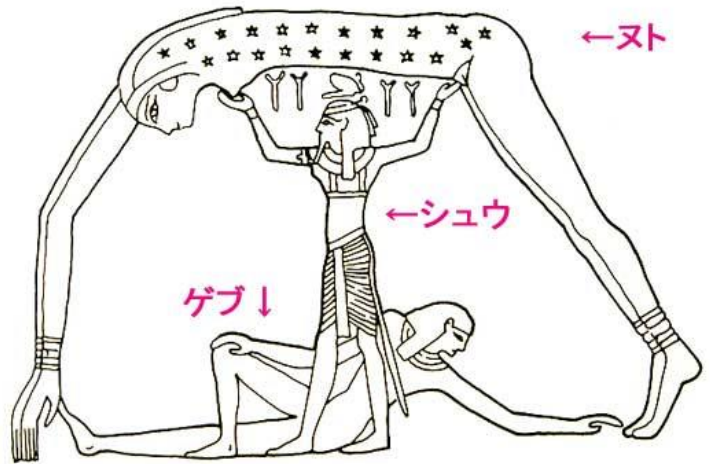
### 3B 地の塵からのブヨ 16-19

16 【主】はモーセに言われた。「アロンに言え。『あなたの杖を伸ばして、地のちりを打て。そうすれば、ちりはエジプトの全土でブヨとなる』と。」17 彼らはそのように行った。アロンは杖を持って



手を伸ばし、地のちりを打った。すると、ブヨが人や家畜に付いた。地のちりはみな、エジプト全土でブヨとなった。

先ほど話しましたように、三つ目の災いは警告なしで下ります。主に対して拒んでいれば、主はその裁きの度合いを強くしておられるということですね。その災いですが、ブヨです。ハエよりはずっと小さく、けれども蚊のようにかまされると痒くなります。ナイル川にはブヨが多いかと思いますが、ここではナイル川からではなく、大地そのものがブヨになります。ナイル川は生命の源ですが、けれども、土そのものは、当たり前ですが私たちが生きていくのに必然のものです。今のようにアスファルトで舗装されていないので、その恐ろしさはひとたまりもなかったでしょう。エジプト人は、土地を「ゲブ」として拝んでいました。ゲブが、自分たちに害を及ぼしたのです。



18 呪法師たちも、ブヨを出そうと彼らの秘術を使って同じようにしたが、できなかった。ブヨは人や家畜に付いた。19 呪法師たちはファラオに「これは神の指です」と言った。しかし、ファラオの心は頑なになり、彼らの言うことを聞き入れなかった。【主】が言われたとおりであった。

呪法師は極端にきれい好きでした。自分の肉体をきれいにすることに専心していました。頭から足のつま先まで体毛と呼ばれるものはすべて剃り、頻りに体を洗い、そしてきれいな亜麻布の服を着ていました。肌の健康がそのまま宗教になっていたのです。したがって、ブヨが体に付いてくるといことは、彼らが自分の宗教の儀式を行うことができなくさせたのです。

ついに、呪法師が魔術を行うことができなくなりました。闇の力に限度があるのです。その境界線は「創造」の働きです。塵からブヨを出すことは、無いものを有るものにするのですから創造主しかすることができません。ここにこの世の霊と、神の御霊との違いがあります。私たちが受けているのは、天地を造られ、死者をよみがえらせる神の御霊です。そのことにおいて、私たちは世において強い、命があると言われているものと区別することができます。

呪法師は「これは神の指です」と叫んでいます。聖書には「神の指」という表現が何回か出てきますが、例えば詩篇 8 篇 3 節には、「あなたの指のわざであるあなたの天あなたが整えられた月や星を見るに」とあります。この天体をも神がご自分の指をもってお造りになりました。そしてバビロンという世界帝国が一夜にした滅ぶその直前にも、「ダニエル 5:5 ちょうどそのとき、人間の手の指が現れ、王の宮殿の塗り壁の、燭台の向こう側のところに何かを書き始めた。王は、何かを

書くその手の先を見ていた。」とあります。神の恐ろしい裁きの予兆としての神の指でした。呪法師も同じように感じたことでしょう。

こうして、悪に対して神の力がさらに偉大であることを見ることができました。そして、私たちはこの方のしもべです。人々の拠り頼んでいることは無力であるという証し、そして神こそが命を与える方であることを見ることができました。